郷土の文化遺跡

＜その5＞

人吉市

太鼓踊り

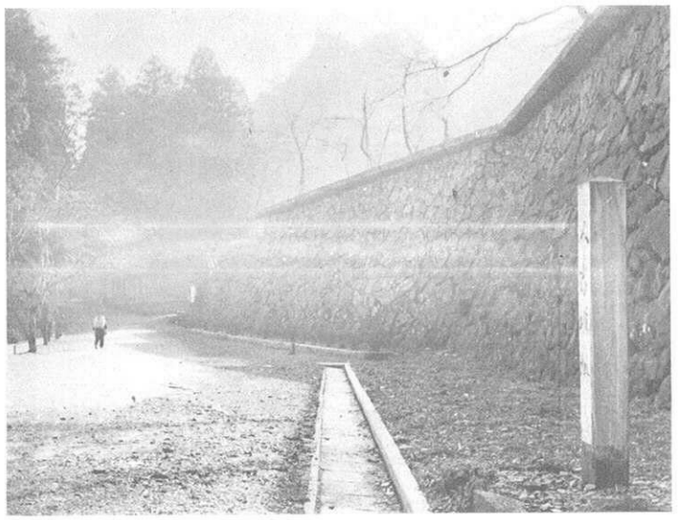
人吉は相良氏が三十五代七百余年にわたり支配してきた土地だけに無形文化財も数多く昔のまゝの姿を残している。この太鼓踊りもその一つである。踊りの起源について石井虞氏は「朝鮮の踊りによく似たのがあるから朝鮮征伐の際朝鮮より持ち帰り日本化したのではなかろうか」といつているが信頼される文献がないので明らかではない。旧藩時代には相良家のお祝い事や春分には御前出演もやり、村々では祭日、縁日、雨乞い等の部落行事にこれを行い、踊る者も見る者もともに楽しむ唯一の健全娯楽として推奨重視され、村の古老より次代の青年へしかも部落の長男へ継承されてきたものだと言い伝えている。踊りは頭（カシラ）と関（セキ）二人脇二人に夫々鐘が従つて十人組で踊られるのが普通である。

人吉城趾

平頼盛の城代矢瀬氏の居城を、建久九年人吉に着任した初代長頼が改修して相良家の本拠とした城で、改修の際、城の西南隅より三カ月形の奇石が発見されたので繊月城とも呼んでいる。その後二十代相良家毎の時城の修築を始め五十年の歳月を費して寛永十六年に完成した本丸、二の丸、三の丸、惣曲輪からなる要害堅固な城である。石垣の上部につき出た武者返しは熊本城とともに他に余り類のない特殊な築城法で知られている。

建物は享保、文化の二度の大火で失い城門等も廃藩後取こわされて当時の偉容を仰ぐことはできないが、川霧に浮ぶ城山、球磨川の清流に沿う蜿々たる城壁は自然の美と人工の美をこよなく調和した名城のおもかげをしのばせてくれる。

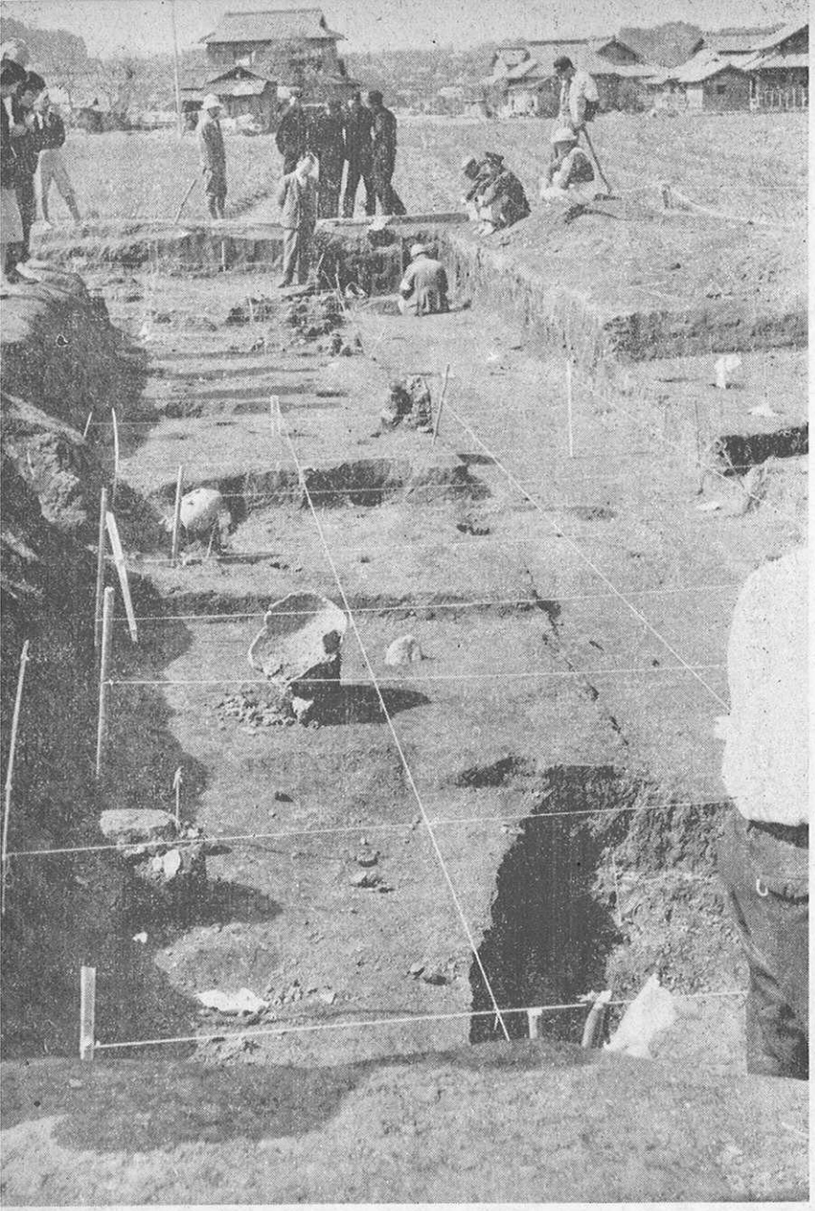
（人吉市教育委員会）



△写真▽
上は勇壮な太鼓踊り
下は人吉城のほとり

文化財をまもろう

ひと口に文化財といつてもすぐにはピンとこない人が多いでしょう。つい最近世を賑わした「永仁の壺」偽作事件では文化財のことがいろいろ取沙汰されましたが、私たちの周囲にも、この文化財と名のつくものが、有形、無形にその数も少くありません。そこで文化の月にちなみ、県の文化財についてふれてみることにしましょう。



＜山鹿市笠仏の古代住居跡の調査状況＞

文化財にもいろいろ……★

文化財といつても、つぎのような種類にわかれます。すなわち、有形文化財、無形文化財、民俗資料、記念物の四つです。

（有形文化財） これは建造物、絵画、彫刻、工芸品、書籍、典籍、古文書その他有形の文化的所産。

（無形文化財） これは演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産。

（民俗資料） つまり衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗習慣およびこれに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で、わが国の生活の推移を知るために欠くことのできないもの。

（記念物） 貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で、歴史上、学術上価値の高いもの。すなわち庭園、橋、峡谷、海浜、山岳などや動物（生息地、繁殖地および渡来地を含む）植物（自生地を含む）および地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む）など。